美術部・情報資料部報（平成十一・十二年度）

美術部・情報資料部異動

平成十一年四月一日付で、奈良国立博物館学芸部長宮島新一は、美術部長に配置換となった。

平成十一年四月一日付で、大和文華館学芸部員城野誠治は、情報資料部写真資料研究室に採用された。

平成十一年七月一日付で、情報資料部文献資料室研究員勝木言一郎は、情報資料部主任研究官に昇任した。

平成十二年四月一日付で、美術部長宮島新一は、東京国立博物館学芸部長に配置換となった。

美術部・情報資料部公開学術講座

第三十三回公開学術講座を平成十一年十月二十二日（金）午後、東京都美術館講堂において左記のとおり開催した。

"写意"と"こゝろもち"—明治中期の日本画と言説—　塩谷　純

室町時代の画と詩—雪舟筆「破墨山水図」について—　島尾　新

第三十四回公開学術講座を平成十二年十月二十五日（水）午後、東京都美術館講堂において左記のとおり開催した。

中世の童子形と神　津田　徹英

中国新疆キジル石窟壁画の仏伝図の諸問題　中野　照男

「日本美術年鑑」の刊行

美術部第二研究室編集による「日本美術年鑑」平成十年度版（平成九年一月～十二月の記事）は平成十一年三月に刊行された。

美術部第二研究室編集による「日本美術年鑑」平成十一年度版（平成十年一月～十二月の記事）は平成十二年三月に刊行された。

黒田清輝巡回展

昭和五十二年以来、毎年開催してきた黒田清輝巡回展を、平成十一年度は九月一日（水）から十月三日（日）まで大分市美術館において開催した。

平成十二年度は一月十三日（土）から二月十八日（日）まで滋賀県立近代美術館において開催した。

研究会

平成十一年度

四月　二十八日　アントニオ・フォンタネージ再考　山梨絵美子

五月　二十六日　親鸞の面影—中世真宗肖像彫刻研究—　津田　徹英

六月　二十三日　フランスに於ける林忠正の活動

一八九〇年代から一九〇〇年のパリ万国博覧会まで　小山ブリジット

七月　二十八日　明治時代の工芸品を見る—その地域性に留意して—　山崎　剛

絵画性と彫刻性の相克—近代工芸にみられるレリーフ表現の位相をめぐって—　大熊　敏之

九月　二十二日　龍虎以後—橋本雅邦とその周辺—　塩谷　純

十一月　十九日　ミニシンポジウム「日本のセザニズム」

一九二〇年代の日本の人格的セザンヌ像の美的根拠とその形成に関する思想および美術制作の文脈について　永井　隆則

（討論）一九二〇年代日本の人格主義的セザンヌ受容とその思想的背景をめぐって　（コーディネーター）加藤　哲弘

十二月　一日　朝鮮王朝時代肖像画の類型および社会的機能　趙　善美

十二月二十二日　明治期におけるミュゼオロジー—ゲッティ研究所の紹介を兼ねて—　鈴木　廣之

二月　九日　「日本美術史学の成立と展開」ミニシンポジウム
書は芸術かⅠ　筒井　茂徳
書は芸術かⅡ　名児耶　明

平成十二年度
四月　二十六日　「近代日本美術史」研究における「受容」の諸問題　田中　淳
五月　二十四日　黒田清輝とラファエル・コラン　山梨絵美子
六月　二十一日　二つの仏陀イメージ―優填王像と阿育王像―　岡田　健
六月　二十八日　特殊撮影による絵画の分析について
―「源氏物語絵巻」調査の中間報告を兼ねて―　島尾　新・城野　誠治
七月　二十六日　「日本美術史学の成立と展開」ミニシンポジウム
明治期における〈文化財〉保護行政の展開
―美術史から建築史そして考古学―　広瀬　繁明
日本考古学の形成　内田　好昭
中央アジア探検隊と敦煌学　勝木言一郎
十月　十八日　龍門石窟研究史　岡田　健
十一月　八日　六朝書道の日本への受容について　松村　茂樹
二月　十四日　福岡・本岳寺の釈迦誕生図　鄭　于澤
韓国の近代工芸における二元構造　崔　公鎬
二月　二十八日　宋風受容に関する言説をめぐって
美術家とパトロン　福島繁太郎と薩摩次郎八　井手誠之輔
―パリで開かれたふたつの日本人展―
三月　十四日　「日本における外来美術の受容についての研究」　江川　佳秀
ミニシンポジウム「水陸画の受容」
東銭湖の四時水陸道場と大徳寺五百羅漢図　井手誠之輔
元末・明の水陸画―毘盧寺と宝壺寺の画題―　中野　照男

愛知県下の水陸画と考えられる作例　山本　泰一
日本に請来された水陸画　鷹巣　純
三月　二十一日　神護寺画像のゆくえ　米倉　迪夫

六六